牡丹の庭

芝木好子

講談社

牡丹の庭

昭和五十二年十一月十六日　第一刷発行

著　者　芝木好子

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
振替東京八―三九三〇

印刷所　信毎書籍印刷株式会社

製本所　黒柳製本株式会社

定　価　一二〇〇円

© Yoshiko Shibaki 1977, Printed in Japan

落丁本乱丁本はおとりかえいたします。（文一）

0093-128786-2253 (0)

目次

牡丹の庭　7
白い打掛　39
隅田川べり　61
聲　87
指輪　115
故宮の壺　137
ゴッホの墓　165
あとがき　192

裝幀　荻　太郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

芝木好子作品集

牡丹の庭

休日の朝、彰子は遅い朝食の支度をしながら、庭へ目をやって磯野と保男が牡丹の手入れをしているさまを見ていた。昨夜の雨で花の傷むのを磯野は気にしていたが、大した雨にもならずに今朝は晴れて、数株の牡丹が咲き揃ったのであった。この庭の年に一度の見ものである。緋色や淡紅色にまじって白牡丹の「白王獅子」のなかば綻びかけた風情は匂うばかりである。磯野は丹精の甲斐があって充ち足りている。今日はいい顔をしている、と彰子はじっと夫を見た。身近かに暮して、もう見馴れたはずの顔が珍しくみえる。いつからこうなったのか自分でも時にはふしぎな気のする生活で、まだ真底からなじまないのを彼も感じているようだが、たかをくくっている気がする。十四歳も年上の男には歯の立たない、どこか分らない部分がある。

保男のほうは父親ほど落着かずに小さいカメラを持ち出して、丁度舞ってきた黒い蝶の止まるのを待って、白く燃える花の精のような白牡丹にレンズをあてたあと、父をふりむ

いて訊ねた。
「一輪、切ろうか」
「切るなら、今のほうがいい」
「緋牡丹がいいね。お母さんはいつもそうしていた」
「白が好きだったが、まだ切るのは惜しいな」
「今年は白がとくべついい感じ。まっしろい花弁は緋色より優美だ。富貴花とよぶのは白牡丹の代名詞という気がする」
保男はそこに母を見るように和んでいた。白い牡丹が加奈子か、と彰子は思い、色白い、ほっそりした先の妻をおもい描いた。もちろん会ったことはない。牡丹はとりわけ手間のかかる花だが、加奈子は好んで長年育ててきたという。磯野と保男は亡きおもかげをしのぶというわけか、牡丹を守って、今では誇りにしている。今年の牡丹の咲き競った庭へ、彼らは彰子を呼んで一緒にたのしみを分とうとはしない。磯野は息子のいる限り彼との時間を大事にして、それ以前の習慣を崩すまいとする。時として新しい妻のことを忘れたようにふるまう。むずかしい息子に気を遣っているともとれたが、夫婦ぎりになっても掌を返したように優しくするわけでもない。彰子は厄介な感情にまきこまれるよりは一人ではみ出しているほうが良いと思いながら、まだ馴れずに、彼らを憎むときがある。自分

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

をなんだと思っているのだとひそかに息巻いて牡丹の庭をみる。一夜、一つ残らず大輪の花をむしり取ったらどうか。二人の男は顔色を変えて彼女をこの家から放逐するだろうか。そう考えて、妙に快感を抱くこともあった。

保男が牡丹を二輪切って戻ってきた。この庭は調ったものではなく、武蔵野の自然をおびた野趣があって、五年前十年前のおもむきのままらしい。牡丹の季節の前後にも菖蒲や都忘れやかのこ草が咲き出るのである。それが古い木口の家によく似合う。彰子はこの家へ後添いにきて一年余になるが、父と息子の大事な庭が好きではなかった。迂闊に花一本折ってもきらわれるからだった。保男が部屋へ上ってきて李朝の壺に牡丹を入れるのも見ないふりでいた。いつだったか嫁にきて間もなく、彼女はこの白磁の壺へ赤い薔薇をたくさん買ってきて挿したことがあった。花好きの磯野が帰るなり眉をよせたが、なにも言わなかった。大学生の保男はあとから戻ったが、彰子のところへきて、

「あの壺、あけて下さい」

ときつく言った。彰子はなぜ花を活けてはいけないの、と言いさして、すぐ気付いて、あの壺は私のじゃないわね、と呟いた。この家には触れてはならないものや、位置を替えてはならないものが多かった。どの部屋の調度も動かし難い存在感があってそこに醸す雰囲気もずっと前から続くものだった。彼女が新しい道具を運びこむと、違和感があって浮

き上った。五年前に亡くなった加奈子の箪笥が納戸からこちらを見ていた。食器棚の茶碗の位置をかえても親子のどちらかがなにか言う。新しく作ったクッションより傷んで古びた昔のものを好むのだった。磯野雅信は十七年つれそった妻を亡くしたあと、五年間ひとり息子の保男と暮してきた。独り身が長ければ長いほど亡妻への追慕の証しになった。彰子はそういう男との縁談にためらいをおぼえたが、磯野はそのころ亡くなった妻の話をしたことがある。

妻が床につくまで取りたてて優しい夫ではなかったが、死病を抱いている妻は哀れが深い。牡丹が咲き、菖蒲が咲くと、その都度妻を背負って庭へ出てやる。郊外のさびれた土地に建った家だが次第に人家が密集してきて、わずかに田園のおもかげの残る庭である。胡桃の木が枝をひろげている。初めのうち加奈子は彼が支えてやると立って庭の花を見廻していた。紺地の浴衣に白博多の細い伊達締めをして身づくろっていた。立っている一分ほどは目を見ひらいて生をたのしむ時間であり、花菖蒲を眺め足りると、頷いた。それからまた磯野の背に負われて縁先へ戻るのだった。

彼女が亡くなって間もない夏の盛りの油照りの日、長い看病に疲れた身体で彼は机に向って墓碑銘を書いていた。享年三十八歳と記すのは痛ましかった。字は思うように書けずに、ほっと一息入れたときだった。庭へ目をやると、菖蒲の葉の前に加奈子が立ってい

る。紺地に露芝の涼しい浴衣で、青白い細面ての顔はこちらを向いている。彼は妻の名を呼びざま、縁へ走り出た。熱気が大地からのぼってゆらめくような日照りに、幻影は消えている。菖蒲の紫の花も残ってはいない。彼は大声をあげていたと思うが、気がついた時は縁先へ倒れこんで息を喘がせていた。幽霊が出る間は後添いは貰えないと思ったが、出たのはそれ一回だった、と彼は話した。

あれは縁談を断わるために言ったのだろうか。ふつう再婚の相手の女に先の妻との恋慕を話す男はいない。あるいは過去に区切りをつけるために話したのかもしれなかった。初めから乗り気でなかった彰子はこれでお終いだと思うとかえって気分が楽になって、幽霊に出るおくさまは業の深い方ですね、と言った。私はとてもあとへ直れませんから、というと、磯野も、妙な話になってしまったものですね、と苦笑した。それからうちの庭を見て帰りませんか、と誘った。彼の家には息子がいて、ちょっと顔を出したが、すぐ外へ出ていった。母を亡くしたのは十六歳くらいと聞いたが、五年を経て大学生になっていた。ひょろ高い、鋭敏な感じの青年に見えて、お母さんと呼ばれる気になれなかった。座敷の中は薄汚れて、長年の男所帯の垢ですすけている。彰子はしみのついた座蒲団に坐ると、急にこの家をさっぱりと洗い上げたい気持をおぼえた。これまでの行詰った生活から逃避するには恰好の場所に思えなくもなかった。磯野ならくどい穿鑿(せんさく)はしないだろうし、別の

自分になれると思った。磯野は縁先の籐椅子に彼女を招いて、
「思ったより明るい、自然な庭でしょう」
と言った。幽霊が出たのはあのあたりですか、と彼女が聞くと、さっきのは嘘ですよ、と軽く受け流した。大学で歴史を教える磯野は帰りに彰子の好きそうな古代絵画を集めた画集を持たしてよこした。
二輪の緋牡丹を挿した保男は、この春から大学院へ通っている。華やかな牡丹は白磁の壺に納まって床の間に置かれた。磯野家のしきたり通りである。牡丹は加奈子の精そのものだから、彰子は見ないようにしている。この古家には女の霊が住みついている。うっかり牡丹を褒めると、保男は妙な目で彼女をみるのだった。これまでの生活の逃避などと安易に考えた罰を彰子は日々に思い知らされてきた。朝の庭からやっと上ってきた磯野へ彼女は告げておかなければならない来客のことを、言いそびれた。夫には気軽にものを言えない、妙に寄りつきにくい時がある。朝の食事に彼はミルクを入れた紅茶をたっぷり飲むのだが、
「保男さんは？」と彰子は毎朝聞く。夫婦が紅茶なら彼は珈琲を、という。先廻りして聞くと、いやココアがいいと答える時もある。
「ぼくはフレンチトーストと、冷い珈琲」

と保男は新聞を持ったまま言った。彰子は玉子をほぐしに立っていく。急いで珈琲を淹れて、氷を入れたグラスにそそぐのである。三人で食事をするとき保男は不調和をたのしむように、右といえば左と言い、彰子をてこずらせるのだった。親子二人で暮した五年間もこんなだったのだろうか。いやそうではあるまい。炊事は早く帰ったほうがすることになっていて、講義のない日は磯野が買出しもしたと聞いた。

「大根もネギも魚も、買物籠に入れて帰ってきたさ」

と彼は言ったが、今はパン一斤も買ってこようとはしなかったし、保男も同様だった。父と息子の緊密なきびしい暮しは五年の月日のあとに終った。彼らはそういうかたちで死者と別れていったのだが、その霊を押しのけて彰子は現実の女の匂いを発散させながら乗りこんできた。古い家に新しい家具はそぐわない。光った真新しい鍋一つ調和しない。適度に古びた飾り棚に置く物を替えても彼らはよろこばない。彰子はどういう仕方でこの家を自分らしくしてよいか分らなかった。今日は食卓へ初めて手製のあんず酒を出してみた。結婚するまで家事に縁のなかった彼女は、料理は得意でなかった。

「味見をしておいて下さらない」

磯野は食後に一口飲んでみて、

「これはうまい」と褒めた。

「よかったわ。保男さんも飲んでみない？」
保男は返事の代りに言った。
「それは杏仁が入ってないだろ。杏仁を少し入れるとあんず酒にこくが出るのさ。母に教わったことがある」
「でもおいしいのよ。杏仁は薬くさくなりそうで入れなかったの。まあ騙されたとおもって」
「朝から飲まされたら、どうかなってしまう」
保男は払いのけるように言った。磯野は知らん顔で郵便物に目を通している。
「そのグラスだけど、チェコの大事なグラスだから、割らないで下さい」
そう保男は言い、彰子は自分の手許を見た。美しいカットの繊細な細長いグラスである。
「なんだか割りそうな気がしてきたわ」
彰子はグラスの細い足を指でつまんで、わきへ押しやった。前にもグラスを一つ割ったことがある。板の間にかがんであわてて破片をひろっていると、磯野が見にきて、そのグラスでよかったと言い、指に怪我をするから破片を拾うのはよせと止めた。割ってよいグラスと、割ってはならないグラスがあるのかと彼女はおどろいた。病人を抱えたころ磯野

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com